

令和三年度

第六十七回青少年読書感想文コンクール

札幌市読書感想文コンクール

受賞作品集

小学校・中学校・高等学校

札幌市学校図書館協議会

後援・協賛

札幌市

札幌市議会

札幌市教育委員会

札幌市PTA協議会

北海道高等学校PTA連合会石狩支部

株光陽社

キハラ株北海道営業所

教育出版株北海道支社

株北海道教育評論社

株図書館ネットワークサービス

光村図書出版株北海道支社

株毎日新聞社北海道支社

一般財団法人札幌市教育協会

株平和堂

株清水書院札幌営業所

東京書籍株北海道支社

株教育芸術社札幌出張所

目次

札幌市長賞	ぼくの大実験	札幌市立南月寒小学校 五年河口 留偉
札幌市議会議長賞	夢を叶えるために	札幌市立向陵中学校 三年松田 莉奈
札幌市教育長賞	勇気とは意外とあっけない	札幌光星高等学校 三年加藤 萌香
札幌市学校図書館協議会会長賞	これからも友だち、これからの友だち	札幌市立平岸高台小学校 三年藤井 雄大
札幌市学校図書館協議会会長賞	『嫌われる勇気』を読んで	札幌市立新川中学校 三年福井 亜梨
札幌市学校図書館協議会会長賞	『老人と海』を読んで	札幌聖心女子学院高等学校 二年目良 茉莉香
札幌市PTA協議会会長賞	せかいに1つしかないズボン	札幌市立緑丘小学校 一年野里 尚慈
札幌市PTA協議会会長賞	人間の心の奥	藤女子中学校 二年粟津 結菜
札幌市PTA協議会会長賞	『きみの存在を意識する』を読んで感じたこと	北海道札幌国際情報高等学校 一年本間 楓華
北海道高等学校PTA連合会石狩支部長賞	周り、社会との関わり	北海道札幌国際情報高等学校 一年橋本 栞夏
光陽社賞	ぼくとオンラインゲームの生きる道	札幌市立ノボリの丘小学校 六年細谷 健人
キハラ賞	『夢をかなえるゾウ』を読んで	札幌市立新川中学校 二年荒木 果凜
教育出版賞	私の幸せ	札幌市立大谷地小学校 四年豊沢 峰々
北海道教育評論社賞	『ベスト』から考えるパンデミック	札幌聖心女子学院高等学校 三年若林 星渚
図書館ネットワークサービス賞	かんしゃのおべんとつ	札幌市立平岡小学校 一年山本 琴音
図書館ネットワークサービス賞	サステナブルな持続可能な地球を目指して	札幌市立新川西中学校 一年佐藤 奈央
光村図書出版賞	『牧野富太郎、日本植物学の父』を読んで	札幌市立北野中学校 一年高橋 駿輔

審査

審査基準

- 内容や主題を的確に把握し、自分の考えたことや感じたことを素直に書いているか。
- 身近な問題と結びつけて考え、読み手の生活がにじみ出るように書いているか。
- 表現に工夫のあとが見られるか。(論旨・構想・表現・表記など) 具体的な観点として、次の七点がある。
 - ① 作品を十分に読み込んでいるか。
 - ② 作品から受けた感動・発見・喜びなど読み手の心情が表現されているか。
 - ③ 読み手の独特の受け取りが学年相応に表現されているか。
 - ④ 読み手の日常生活や考え方が、どこかににじみ出ているか。
 - ⑤ 本との付き合い、本との出会い、本を手にしたときの喜びなど、本に対する読み手の心がにじみ出ているか。
 - ⑥ 読書生活が日常の中に溶けこんで、自然な姿で読書しているか。
 - ⑦ 文体や語彙を工夫しているか。
- 本の選択に無理はないか。
- 応募規定に合っているか。

審査の方法

- 一 事務局で作品規定に従い整理。応募票は切り離し、作品に学年・対象図書別に通し番号を記す。学校名や氏名は審査段階で明らかにしない。
- 二 第一次審査により、第二次審査対象作品を選考。その選考にあたっては、一作品二名以上の審査員により評価し、協議の上決定する。
- 三 第二次審査では、佳作以上の該当作品を小学校・中学校・高等学校別に審査。担当審査員の協議の上、決定する。

札幌市長賞

ぼくの大実験

札幌市立南月寒小学校 五年 河口 留偉

ぼくは今回『ぼくはじっとできない』を読んだ。家庭教師のゆきりん校長がぼくにいい本を選んでくれた。ぼくが家や学校で困っていることと解決してくれたのがゆきりん校長だった。本当に、ありがとうございます。

このデイヴィットは小学三、四年生に似ていると思う。ゴールスキー先生も、そのころの先生に似ていると思う。ぼくは三年生の二学期の最初に「じっとできない病」になり、四年生の一学期中盤に悪化していった。先生もゴールスキー先生みたいにルイ・モードで注意して、さらに、居残りもさせられ、大変な世界だった。

ぼくはデイヴィットと同じで、しつこいアイデアが浮かんでしまう。帰ったら何をするか。例えば「スマブラでマリオやクッパなど使って対抗する」他に「デュエマで弟と勝負する」など。さらに、そのはずみでドラえもののび太くんみたいにねてしまう事件がよくあった。

デイヴィットはひなん訓練中、アイデアが浮かんで片方の目をつぶって手を肩にのせてウサギみたいにピョンピョンして、どこまで列に並べるかした。ただ、ぼくは絶対にそんな事はしない。クラス友達や先生に迷惑だ！でも、四年の頃はママがよく学校に来てお話していた。その原因はわからない、もしかしたらぼくもみんなにめいわくをかけてたのかもしれない。

ぼくは考えることが得意で、考えたことをノートに書くことが好きだ。しかし、考えているのは遊びだけ。勉強のことは書かない。でも、デイヴィットが、みんなに迷惑をかけないように工夫したのと同じで

ぼくも何か考えなくちゃ。

ぼくもちゃんとした人間になりたい。そして、面白いゲーム実況者になりたい。どんな人でも楽しみ今大活躍しているゲーム実況者みたいに。そういうのになりたいと願っている。

デイヴィットは集中して勉強しようとするが、いいアイデアが浮かんで、それで先生に怒られてしまう。それはぼくと一緒で、でも面白いことを考えていない時はしつこい寝てしまう。デイヴィットとぼくは、ドローくらいだ。だが、このことは小学三四年のこと。今ぼくは五年生で、みんなに迷惑をかける事はあんまりない。授業を真面目に受けるようになった。そして、お母さんが学校に行くのも少なくなつた。しかし、自由ちように勉強のことを書くことはない。

ぼくはまだ、デイヴィットみたいな解決方法が浮かんではいない。けれど解決方法を百個ノートに書いて、それを学校でやってみる。学校にスライムもって行ってちょっと遊ぶ。学校で先生のお手伝いをする。ストレス・ボールで気合を高める。タイマーでじっとできないの時間をはかる。ノートにふせんを入れて気合がでるのをかいてやるきを上げる。ぼくの実験はこれからだ。

『ぼくはじっとできない』 バーバラ・エシヤム著 岩崎書店

札幌市議会議長賞

夢を叶えるために

札幌市立向陵中学校 三年 松田 莉奈

情熱。夢。そんな輝かしい言葉は、私の中に存在するのだろうか。この言葉は、人の生きがいとなり、時には人を苦しめる。しかし、牧野富太郎は、一生情熱と夢を隣合わせに人生を歩んだ。

この本の主人公である牧野富太郎は、一生を植物学に捧げた人だ。神から絵を描く才能とひたすら植物を愛する才能を与えられる。学歴はなく、裕福な家庭に生まれたものの、お金を使い果たし、借金取りに追われるなど、波乱万丈な人生を送る。けれど、植物学は諦めず、誰にも負けない情熱と夢を持ち続け、色々な人に支えられながら、才能を武器に世界の富太郎と呼ばれる人物となった。

富太郎は、何度も研究を続けることが困難な状況に陥る。そんな時に毎回助けてくれたのが、かけがえのない仲間だった。私にもそんな仲間がいたからこそ、今の自分がいると思う。

去年の九月生徒会役員選挙があり、生徒会長に立候補した私は、落選し人生で大きな挫折を経験した。私は、中一の頃から生徒会書記を務めていた。当時の担任の先生に「生徒会に入ってみないか。」と誘われ、興味を持ち、入ることを決意したのだ。入った当初、周りにいた先輩方の輝いた目と無駄のない行動に尊敬の気持ちを抱いた。そして、一年がたち、「今度は私が会長となり、みんなを引っ張る。そしてより良い学校を目指し、過去の先輩のように素晴らしい生徒会を作っていきたい。」と思う会長に立候補した。しかし、立候補者がもう一人現れ、どちらも譲る気はなく、選挙することとなった。選挙期間、たくさんの友達が私のことを支えてくれた。励ましのメッセージや、立会演説のギリギリまでそばにいてくれた友達もいた。結果は、落選。心に傷を負った。でも、その後も友達は何の言葉や遊びに誘ってくれるなど、私のために気を使い、今まで通り普通に接してくれた。そのおかげで、私は短期間で立ち直ることが出来た。そんな仲間がいたからこそ、今の私がいる。仲間感謝したい。いつか恩を返したいと思う。仲間の支えが大切であるということ、私の経験から、そして、富太郎の人生から学ぶことができた。

この本を通し、私と富太郎の違いに感銘を受けた。それは努力をすることだ。富太郎は何があっても諦めず努力を続けた。だが、私は無理だと思ったらすぐ諦め、努力をしようと思わない。私と富太郎の圧倒的な差である。富太郎が言う、「精進一撻」。

この約束事は、どの人にも当てはまることなのだ。

この本を読み終えた時、学校の授業でSDGという活動に出会った。それは、世界中にある課題を世界の皆で二〇三〇年までに解決していくというものだ。私は、この活動で世界だけでなく日本にも飢餓や貧困に苦しんでいる人がいるということを知り、公衆衛生に関心を持った。私は、このことを知った時、「私もこんな人たちを救いたい。」という小さな思いが芽生えた。「世界の人を救うのは容易ではない。でも、日本人なら私が手を差し伸べることで救われる命があるのではないか。」私は、その時、夢を持った。富太郎のような大きな夢ではない。けれど、私の背中を押すこととなる小さな夢なのだ。「私は、将来医者になりたい。」という小さな目標。それを叶えるためにも、富太郎のように行動を起こす。医者になるためには、医大もしくは医学部に行かなければならない。とても難しく、大きな壁となるだろう。そのために、もつ、できること。勉強をし、自分が目標とする場所にたどり着けるように努力するのだ。何があっても諦めず、努力してきた富太郎。私にだってできるはずだ。

今までの私は、情熱や夢を持つことせず、努力もしてこなかった。言い訳という弱くもろい殻に閉じこもり、自分という一人の存在を開花しようとしていなかった。しかし、そんな私を富太郎は変え、夢を引き出してくれた。今では、「医者になる。」という目標も抱いている。その目標を叶えるために、今この一瞬一瞬を大切に過ごしていく。時には辛い時があるだろう。もう無理だと諦めようとする時だ。と来る。でも、一人で乗り越えようとしなくていい。富太郎も、一人ではあの偉業を成し遂げることはできなかった。私が困難に立たされた時は、周りの仲間を頼ればい。選挙の時のように。今、進んでいる道は、正解かは分からない。しかし、努力せず楽に時を過ごしていきなり、努力して色々なことに挑戦していくこと、そんな人生の方が輝いている。今まで見えていなかった世界を見ることで私は一回り、大きく成長したと思う。次に進む時は、諦めずに努力し続けることを大切に、一歩一歩を怯えずに踏み出していこうと思う。かつて、あらゆる壁を乗り越えた富太郎のように。夢を叶えるために、今、私はその一歩を踏み出していこう。

『牧野富太郎 日本植物学の父』 清水洋美・文 汐文社

札幌市教育長賞

勇気とは、意外とあつけない

札幌光星高等学校 三年 加藤 萌香

私は高校三年生だ。受験生は夏休みで勝負が決まる、なんて言われるほど忙しいこの時期に読書感想文を書く余裕など、正直ない。それでもこうして筆を執ったのは、どうしてもこの本を一人でも多くの中学生・高校生に読んでもらいたかったからである。

作者の住野よるさんは、映画にもなった名作、『君の隣をたべたい』で有名だろう。彼女が高校生の時から執筆活動を行っていること知って、だから彼女の作品は高校生の複雑な心の機微が上手く表されているんだな、と深く納得した。今回私が紹介する『か』も、『し』『い』『い』『い』『い』『い』も、舞台は高校生活である。主人公である五人の高校生の、二年次の半ばから三年次の半ばまでが描かれており、主軸となっているのは恋愛だ。だが、私がこの本を多くの人に届けたい理由は、ある主人公の恋愛ではなく「悩み」に救われたからだ。その主人公は「パラ」という。

本名は黒田で、パラというのは「パッパラパー」が由来のあだ名である。その由来の通り、彼女の言動は奇想天外だ。そして、何を考えているか分からない。しかしそれはパラが意図してそう演出しているのであり、本当の彼女は人に興味がなく、全て計算した上で損得に基づいて行動するような冷たい人間なのである。周りに知られたくない冷えきった内面を隠すために、突飛な言動を繰り返しているのだ。そんなパラと私には、通ずるものがあり、私も周りの人に本音を言えず、面白おかしくその場をごまかすことは多かった。そしてパラも私も、これは本当の自分じゃない、周りを騙して生きている、と感じ、次第に辛くなってくるのだ。パラは友人に、自分はパッパラパーになりたくて演じていただけだ、と打ち明けた。それは彼女にとって一世一代の勇気を振り絞った告白であったはずで、私には到底できないことだ。私はドギマギして友人からの返事を読み進めた。が、それは私と、きつとパラも予想していたような軽蔑を含んだものではなかった。

「いや、なんか、スツとしてさ。やつとこいつ本音を言いやがったなっていうか」「そう言ったら彼は笑ったのだ。そして、

「俺だってさ、本当はそんなしつかりしてねえけど、さつと自分になりてえんだよな」

「ただ、俺とかはさ、なりたてどもと」なるのしつこいのは、下手なんだよな。それ

がさ、パラは上手すぎるんだよ。」

「もうちょっと気楽でいいんじゃないかねえかと思って。」

と続けた。パラは何も言えなかった。

結局、パラはその後とも変わらさずパッパラパーだった。考えた結果、それが彼女自身だと分かったからだ。とはいえ何一つ変えなかったわけではない。周りの人と、本当の友達として向き合うという覚悟を決めたのだ。私は周りの人を友達だと思っていなかったというのではないが、本音を言えない引け目からどこか壁を作っていた。それがある限り、私にはきつと「本当の友達」なんてできない。私は「私」を、少し変えてみることにした。

何故私は胸の内を明かせないのか。パラは冷たい内面を隠すためだったが、私は自分の意見を否定されるのが怖いからだ。人と違う考えを持つことが多いが、それを口に出したら仲間外れにされるかもしれない、でも自分に嘘をつくのも嫌、そう思って結局うやむやにする。そう気付いたので、ある日友人と話していた時に自分の意見を述べてみた。相手のリアクションが怖くて、声が少し震えてしまったが。しかし、友人は驚いたように目を睨って何も言わない。やっぱり言わなければ良かった、何とかいつもごまかさないと。そう思って言いかけた言葉は、友人に遮られた。

「その考え方はなかった。詳しく教えてよ」予想外の反応に、今度は私が何も言えなかった。否定されるどころか、受け入れてさらに知ろうとしてくれるとは。こんなに優しい友人がいながら、一体私は何に怯えていたのだろうと、小説で見飽きたフリスが頭に浮かんでいた。

あれから数年経った現在、ごまかして逃げてしまうことは、ゼロではないがだいぶなくなつて、少なくとも壁は作らなくてよくなった。周りの人は誰も私を否定しなかったし、むしろ賛成してくれることも多い。今考えれば当然のことかもしれないが、当時の私はそれに気付かず、一人で勝手に悩んでいた。そんな時に私と出会い、私の味方になってくれたパラには、本当に感謝である。

他の四人の主人公たちも、それぞれに悩みや秘密があり、五人は互いに助け合つてそれらを解決していく。途中、「なりたて自分」の話があったが、私は彼らのような、あるいはこの小説そのもののような「勇気が出ない誰かの背中を押せる自分」になりたい。今更には無理でも、少しずつ。そう思いながら、私は今日も受験勉強に励む。

札幌市学校図書館協議会会長賞

これからの友だち、これからの友だち

札幌市立平岸高台小学校 三年 藤井 雄大

シドニーはばくみだ。シドニーはオーストラリアからドイツの動物園につれて行かれたカモノハシだ。仲間がいるオーストラリアに言葉を教えるために帰りたいと思っていた。友だちのことがすきなのはばくと同じだ。ばくは四月に旭川から札幌に引っこしてきた。シドニーもルフスに出会う前は、ドイツで友だちがいなかったらう。多分悲しくて、早く帰りたい、友だちに会いたいと思っていた。そこがばくとにている。

ばくの一の番の友だちは一、二年生で同じクラスだったゆきだ。はじめは、ゆきから声をかけてくれた。二人でおにごっこをしてとても楽しくて次の日もやろうと思った。学校で毎日会えるからばくは学校に行くのが楽しくなったし、休み時間はほとんどいっしょに遊んでいた。ゆきが風邪で休んだ時はさみしかった。

だから、お父さんから引っこしをすると言われた時は、立ち直れないほどショックだった。学校でも泣きそうだったこともある。札幌に引っこしてからも、どうしてもゆきに会いたかった。一人でも旭川に行きたい。バスか、電車が、自転車でも一人では行けない。ばくはまだ子どもだから。

シドニーとルフスが二人だけでドイツからオーストラリアに行けたことはすごいことだ。もしシドニーがルフスに会えなかったら、オーストラリアに行くどころか、おなががすいて死んでいたかもしれない。シドニーとルフスは友だちであり親友であり、家族でもある。

ばくは札幌に来て四か月だった。今では新しい友だちもいる。同じ

マンションに住んでいて、朝はいっしょに登校しているし、ほうかごもよく遊んでいる。はじめて会ったときにやさしそうで、なかよくになりたいと思ったから自分から友だちになろうと言った。もし声をかけなければ、ただのクラスメートだったらう。あの時に勇気を出して話しかけてよかった。

八月一日、四か月ぶりにゆきに会えた。会う前は、引っこす前みたいになかよくできるかドキドキしていたけれど、えきでばくのすかたを見つけたら走って来てくれてとてもうれしかった。久しぶりとは思えないほど楽しくて、気づいたら八時間もたっていた。大すきな友だちといると、時間がたつのがあつという間だ。ゆきとわかる時は、札幌に引っこした時と同じようにさみしかった。でも、きつとまた会える。友だちだから。

今のところ、ばくの一の番の友だちはゆきだ。でも、ばくはこれからずっと札幌でくらししていく。シドニーがルフスと出会えたように、今後もっと気が合う友だちがあらわれるかもしれない。それでもゆきは友だちだ。友だちは会えても会えなくても友だち。友だちかどうかを決めるのは自分自身だ。ばくはこれから、もっとたくさんの人に会って、友だちがふえていくだろう。とても楽しい未来がまっている。

『ばくの一の番の友だちはカモノハシ』 ミヒヤエル・エンゲラー・作

徳間書店

札幌市学校図書館協議会会長賞

『嫌われる勇氣』を読んで

新川中学校 三年 福井 亜梨

「私には存在価値がない。」「このよつな劣等感を抱える人はこの世に多く存在する。だが、私たちを苦しめる劣等感は全て「主観的な解釈」であり、自らの手で様々な意味付けができる」と哲人は語った。

この『嫌われる勇氣』は哲学者の岸見一郎さんとフリーランスライターの高賀史健さんによって書かれた自己啓発本である。この本の構成は、幸せに生きるための答えを見つけてよつとする青年と、世界はどこまでもシンプルだと語る哲人との対話形式となっている。その中でも私がこの本の中で特に衝撃を受けた二つの論についてこれから述べていこうと思う。

一つ目の論は承認欲求についてだ。承認欲求は人間の本能でもあるため、私たちとは切っても切れない関係にある。私自身、親や上司、先生などに認めてもらうことを望むのはごく一般的なことだと思っていた。しかし、アドラー心理学では他者から承認を求めることを否定している。これはなぜだろう。そう思った私は過去の記憶を少し遡って考えてみることにした。

あれは私がミニバスケットボール少年団に所属していた頃。私は入団する時期が遅く、同学年との技術や経験の差が大きかったため、必死に追いつく努力をしていた。また、六年生最後の大会に出場したいという気持ちがあった私は、監督に認めてもらおうと、厳しい練習もこなしてきた。我ながら真面目に一生懸命に練習へ参加していたと思うが、結局のところ、試合には数分程度しか出場させてもらえなかった。それも負けを確信してから出場だった。私はこの時悟った。必ずしも努力に見合った承認が得られるとは言い切れないのだ。

このことを思い出すと今でも悔しさが込み上げてくるが、これも承認欲求の一つの例であろう。当時の私がバスケットボールを辞めずにいた理由は、決して楽しいからではなく、他者に認めてもらえないことが悔しかったからだと思う。このように他者の評価ばかりを気にする生き方は、他者の人生を生きていることになりかねない。アドラーは警鐘を鳴らす。まさにあの頃の私がそうである。私は監督に認めてもらうための働きかけをするにはなまけても、強制的に認めさせることはできなかった。すなわち、私の思い通りに監督の心を動かすこと自体、到底不可能だったのだ。私はこの教えを知り自分のしよつとしていたことの愚かさを痛感した。

二つ目の論は他者貢献についてだ。私は先日学校で行われた募金活動に自分のお小遣いの一部を寄付した。その時私は何を言われた訳でもなかったが、誇らしげな気持ちになり、幸福感に包まれていた。アドラーはこのように他者に貢献することは自分の価値を実感し、存在意義を確認できる手段だと説いている。一方、他人を信頼し仲間とみなすことができなければ貢献も偽善に繋がることも述べている。私も他者に貢献しているのは分かっている。先程の募金の例のように幸せを感じられないことが以前あった。それは我が家の朝食準備中の事であった。我が家では朝食準備は家族全員が協力して取り掛かるものとしている。だが一時期、準備の大半を私のみが行っていたことがあった。私自身、家族のためになっていると思いつつも、何食わぬ顔で朝食を摂る家族に不満を抱いてしまった。この時私はアドラーが言う「他人を『敵』とみなす行動」をとっていたのだと考えられる。「家族」は繋がり深い仲間であるはずなのに、私は無意識のうちに敵だと思っていたのだ。私はこの論から他者を敵とみなしている以上、いくら他者に貢献しても幸せにはなれないということを知ることができた。

さて、私たちが幸せになるための方法は何だろう。確かに承認欲求を捨てたら、他者に貢献したら幸せになれる、というのは事実だ。しかし、それらをすべてに実行するというのは至難の業である。なぜなら、あのアドラーでさえ、アドラー心理学を理解するにはこれまで生きてきた年数の半分は必要になると述べているのだから。では、私たちが今からでもできることは何か。それは承認欲求の対象を自分に置きかえること、すなわち自分を認め受け入れることである。気配りができる自分、勇氣のない自分など良い面も悪い面も全て受け入れ、全てが自分を形成しているという考え方を取り入れる。すると自然と他人と比較せずとも自分の価値を知ることができるのではない。また、他者貢献への見方を変えることも大切だ。私たちの生活は常に支え合いでできている。例えば外食時では、私たちは調理員の方に貢献し、さらには原材料を育てる農家の方にも貢献しているのだ。「このような異なる見方による他者貢献に目を向ければ、より幸せを身近に感じられるのではないか。」

新たな思考の癖をつけること。これこそが幸せの第一歩になるのだと私は考える。

『嫌われる勇氣』 岸見一郎・高賀史健・著 ダイヤモンド社

札幌市学校図書館協議会会長賞

『老人と海』を読んで

札幌聖心女子学院高等学校 二年 目良 茉莉香

「人間ってやつ、負けるようにはできちゃいない。」

物語の主人公サンチアゴの台詞は私の心を軽くした。何もかも失った老人から何故この言葉が出たのだろうか。

昨今の世界情勢は、新型コロナウイルスの襲来で、その影響は想像以上に深刻であり私達を苦しめている。不安や不満、ストレスが続ぎ、そうした苦しみから未来に可能性を見出しづらくなり、生きることに消極的になっていくのではないだろうか。私も、思い描いていた学校生活を送ることができず、大きな希望を抱きづらく単調な日々を送っていた。期待して裏切られることが怖いからかも知れない。けれども、二度目のコロナ禍の夏休みにこの作品に出会い、自分の考えの愚かさに気が付いた。海を愛する漁師のサンチアゴは八十四日間にもおよぶ不漁に苦労していた。漁師仲間からは落ちぶれた漁師とからかわれていた。しかしサンチアゴは自らを漁師であることに強い誇りと信念を持っている。たとえ魚が何日も釣れなくても一人で漁に出ようと揺らぐことはなかった。サンチアゴの目には不屈の生気がみなぎっており、彼を心から尊敬し慕っている少年マノーリンもいるからだ。

今日こそはと思いつつ、いつものように漁に出る。すると、巨大なカジキが網に引っかかる。サンチアゴはたった一人で巨大魚との死に物狂いの対決に勝利し見事に仕留める。四日間にもわたる死闘の中で、彼は両手を酷く痛め、巨大魚に網を引かれ倒れこんで打ち付けられた顔から血を流す。サンチアゴの戦っている相手は魚ではなく彼自身なのかもしれない。負けてはならぬと自分と戦っている。そしてサンチアゴは、何度も「あの子がいたらなあ。」と自分を慕う少年のことを思い独り言を繰り返した。それは若さを失った自覚に加えて、漁の本領や海の奥深さを少年にも伝えたいという願望も込められていたはずだ。ところが帰路、何匹ものサメにカジキを襲われ、みるみる食いちぎられ、背骨だけになってしまつのである。しかしサンチアゴは魚との闘いに負けたわけではない。彼にとつてこのカジキは生活の糧とするための獲物というわけではなく、ライバルであり、兄弟分であり、自分と重ね合わせられる存在でもあったのだ。この魚を釣り上げることで、自分自身に勝利したと言えるだろう。このカジキの存在は、命を懸けるほど大切なものだったのだ。

私にとつては、家族や友人が大切なものであるが、私も大切な家族や友人のため

に命がけの行動ができるのだろうか。例えば、突然、家が火事になり、家族がまだ家の中に残っているとしたら、私は何も考えずにすぐ火の中に入って助けに行けるのだろうか。目の前の火に圧倒されて何もできずにいるかもしれない。サンチアゴだったらこのような状況でも何も恐れずに咄嗟に火の中に入っていくのだろうか。サンチアゴが私には真似できない勇敢な行動が取れるのは、何十年もの間漁を続け、毎日激しい海に出て、危険と背中合わせの毎日を送って来たからだろう。一方私は助けないという気持ちがあっても、怖い、危ないという気持ちから中々行動できないかもしれない。一人で必死に戦って、骨になったカジキを守り抜くサンチアゴの姿から、自分にはない勇氣と誇りを感じた。

そして、港に辿り着いたサンチアゴを見つけた少年は、安堵して涙を流しながら、早く傷だらけの手を治して、これからも釣りのいろいなることを教えてくれるように頼む。失望し、「もつ見放されたよ。」というサンチアゴに、「そんなのどうでもいい。今度は僕の運を持って行く。」とまた一緒に釣りに出かけたいと頼む少年の姿に胸が熱くなった。少年のように相手の悲しみを受け止め、信じたものを結果や周りに左右されず信じることが出来る人間になりたいと思った。

「人間ってやつ、負けるようにはできちゃいない。」というサンチアゴの台詞は、「ぶちのめされても諦めない。」ということではないだろうか。この物語を読み終えた時、私は目を閉じて、自分に静かに問いかけた。私には彼のような真の勇氣や誇り、自信を持って突き通せる信念があるのだろうか。今の私にはまだないのかもしれない。しかし、いつか自分なりの誇りを持った人間になりたい、否、ならなければならぬと思つた。サンチアゴの生き方に触れ、結果を恐れずどんな時でも希望を見出して挑戦し続け、逃げずに立ち向かって行く勇氣と強さを学んだのだから。

これから私が担う人生には、この巨大魚のような困難がたくさんあるだろう。その時はサンチアゴの言葉が私の背中を押してくれるに違いない。挫けても諦めず、また起き上がり、強い一歩を踏み出したい。

私の心の中に朝の穏やかな海が見え、サンチアゴと少年が一緒に漁に出ていく姿が見えていた。

『老人と海』へミングウェイ・著 高見浩・訳 新潮社

札幌市PTA協議会会長賞

せかいに一つしかないズボン

札幌市立緑丘小学校 一年 野里 尚慈

ぼくのズボンは、すぐにやぶれます。なぜかはわかりません。ズボンにあながあくと、おかあさんはすべにすてるといいます。ぼくは、それがすこしだけいやです。ながくはいたズボンは、かぞくみたいにたいせつで、ぼくのたからものだからです。ズボンがすてられそうになると、とてもかなしくなります。

ヒキガエルとハリネズミのすえっこは、ふるいようふくを「すてていい」「いやだ」といったけれど、ぼくはぜったいにそんなことはおもいません。あたらしいようふくをかってもらうのはうれしいです。でも、ずっとつかってきたようふくもたいせつだからです。

なつやすみに、ぼくはおかあさんからダーニングをならいました。まずは糸のいろをえらびました。ズボンはみどりいろで、糸はかっこいい青いろときれいな水いろです。たて糸はかんたんだったけれど、よこ糸はむずかしかったです。ジグモンタとちがって、ぼくの手は二本しかないのです。じかんがかかりました。ズボンがやぶれるたびに、おかあさんがあなをふさぐのはたいへんだとおもいました。ダーニングがかんせいすると、ズボンはまえよりもカラフルでかっこよくなっていました。おかあさんが、「せかいに一つしかないズボンになったね。」とびっくりしました。

ハリネズミのベールも、もとどおりではなく、あなのひとつひとつに花や草のかざりをつけて、せかいに一つしかないベールになりました。フクロウのおかあさんが、もつふのあなを子どもたちのおもいでといったので、ジグモンタは「あながざり」をおもいつきました。ぼ

くは、みどりのズボンを見ると、ダーニングにちょうせんしたことや、ジグモンタをおもいだして、たのしい気もちになります。ぼくのズボンのあなも、すてきにかざられて、おもいでにかわりました。

これからも、ズボンにあながあいたらダーニングをしたいです。そして、せかいに一つしかないズボンをたくさんつくりたいです。

『あなふさぎのジグモンタ』

とみながまい・作 たかおゆつこ・絵

株式会社ひさかたチャイルド

札幌市PTA協議会会長賞

人間の心の奥

藤女子中学校 二年 粟津 結奈

「頭がよくってさ、クラスをまとめられるような人で。」

「明るくて、みんなの嫌がることを率先してやって、いつも親切で」

いい人とはどのような人物か。私は「思いやりがあって、優しい人」だと思っていた。しかし、その考え方は間違っていた。このことを気付かせてくれたのは『いい人ランキング』だ。

桃は友人に間違っている箇所のあるノートを買ってしまい、そのノートが何人も手にわたっていた。せめられている桃を見て怖くなった。ノートを借りた側は授業中にノートを書かなかつたのだから、貸してくれた人に「そのせいでテストを間違えた。」と言ったことはできないはずだ。ノートを貸した側は、何も言われなくても自分のせいでみんなが間違ってしまったと自分をせめてしまつたろう。ノートを借りた人が、「大丈夫だから気にしないで。貸してくれてありがとう。」とサポートの言葉をかけていけば、何事もなく誰も傷つかずに終われたと思う。しかし沙世子は「ふん、罪の意識はなし？」と言いつつ、桃にお詫びに食べ物をおごらせた。これはあってはいけない事だ。桃には「いい人」という先入観があり、それを周りに押しつけられているように感じられた。一度、その人に対する先入観が広まってしまつと、それにしばられる。

自分もそつだ。私はそれなりに勉強や、やるべき事はやってきた。そして、友人から「テストの点数を教えて。どうせ私より良いでしょ。」「何でもできて良いよね。」と言われた事がある。このような言葉を聞くと、もつとがんばってみんなが思っている私の姿にならなくてはいけないと考えるてしまつ。何でもできる人はいないのにも関わらず、完璧にやらなければと。おそろく周りの人はイメージを押しつけるつもりで言っているに違いないだろう。しかし、人から言われると、自分がそつであらなければいけないと感じ、自分で自分を苦しめ、負担になることが多い。その負担で立ち直ることができなくなる。

しかし桃は、ずっと人に優しく接して、人にゆずったり、自ら大変な仕事を引き受けていた。本当に尊敬する。でも、自分がいじめられているという事実を目を向けなかった桃は、しっかりと自分に目を向けるべきだと思つ。

「人間の『いじめ遺伝子』とホワイトライオンの白い遺伝子はおんなじだ。」とい

う圭機の言葉は今でも心に響いて残っている。この言葉にはとても深い意味が込められているように感じた。ただ一つ言えるのは、一人一人が意識して絶対にいじめが起らないようにしなければいけないという事だ。

いじめに明確な定義はない。そのため、ニユースで取り上げて、対策をとつてもなくなることはない。私は、人が傷つき立ち直ることができなくなるほどひどい事をされるのは全ていじめだと考える。いじめは負の連鎖だ。誰かをいじめて、その人がいなくなると他の人をいじめ始める。いじめは人間の奥深い所にある闇が形として出現してしまつたものだ。私は考えるようになった。この闇を持っていない人はいないだろう。闇を表に出さないようにしてこそ、いじめはなくなるのではないか。桃は、一人でいじめられている人を救い、クラスのみんなと仲良くしていた。桃は本当に素敵だ。いじめから抜け出し、リスクを負って人を助けに行く。桃は「いい人」ではなく、「ヒーロー」のようだと私には思えた。

桃のように、私はできない。しかし、この本を通して自分の今まで他人に言ってきたことや行動を見直すことができた。私は友達を傷つけてしまったことがたくさんあつたと思う。これからは、友達を絶対に先入観で見ない。そして、他人を自分の観点で測つてはいけない。相手の気持ちを考え、負担になってしまつような言葉を言わないようにする。今まで自分の中で勝手に作つてしまつていたイメージは、友達を色々な面から見ることができなくなり、良い所を見つけれなくなつてしまつても恐ろしいものだった。これからは、友達の良い所をたくさん発見し、たくさんの人と話したい。そして、いじめや嫌がらせが絶対に起らない毎日を楽しく過ごすことができるクラスにしたい。

『いい人ランキング』は自分が持つていたしてはいけない考え方を根本的な所から変えてくれた。この本が私を助けてくれた。自分たった一人の行動で友達を大きく傷つけてしまう事を知つた。何かを言つ時、行動をする時は、自分がそれをされて嫌な気持ちにならないのか一度確認をしなければいけない。

本は人生を変えてくれる。いじめがなくなくなり、楽しく生活できる人が増えることを願ひ、また、そのようになると信じている。

『いい人ランキング』吉野 万理子・著 あすなろ書房

札幌市PTA協議会会長賞

『きみの存在を意識する』を読んで感じたこと

北海道札幌国際情報高等学校 一年 本間 楓華

ある日、私はお気に入りのアーティストの曲を聴いていた。何気なく概要欄を見ると、そこには「basep o.u:きみの存在を意識する」の文字があった。素晴らしい音楽が私を素晴らしい本に出会わせてくれたのだ。書店に行き、本を手にとると表紙には学校の教室らしき景色と真つ青な空がある。その光景は私の頭に「青春」というワードを浮かべさせた。だが、数十ページ読むと私の思つ青春とは違った世界が広がっていた。

ある中学校には一見普通の生活を送っているがそれぞれの事情を抱えた生徒たちが通っている。字を読むのが苦手な子、字を書くのが苦手な子、性別に違和感を持つ子、過敏症で教室に行きたくても行けない子。語り手の人物を変えながら、自分なりの向き合い方を模索して成長していく様を描いたのが本書だ。

字を読むのが苦手な子、ディスレクシアのグリーゾンに在る石崎ひすいという子のパートでは、識字の困難を理解されないひすいのもどかしさをひしひしと感じた。しかし、ひすいより少し歳が上となった今の私がひすいの立場になったら、もっと担任の先生などに困難があることを主張したり、本当は読んでいない本を読んだと嘘をつくこともしなかったと思う。だがそれをしないひすいの性格が中学生らしさをよく表していると思った。

それに対し、書字の困難がある猪熊心桜のパートでは、心桜は困難があることを主張し続けていた。合理的配慮を求める心桜に対し担任は少しずつ対応をしようとする。ひすいのパートで感じた理解されないもどかしさに加え、正しく理解されないつらさを感じた。そんな環境に置かれても立ち向かい、自分にできる努力を最大限した心桜は中学生離れた強さを持っていると思うし、私の尊敬する登場人物であった。

「だから、ジブンは『わたし』『でも』『へ』『でも』なくって、『自分』だから」これは性別に違和感を持つ入来理幹が、なぜ一人称を「ジブン」としているのかワラズメートに問われた時の回答である。これを読んだとき、私はこれ以上ないといつうくらい納得していた。私は体の性も心の性も女性であると自認しているが、時折、性別なんて気にする必要があるのか、と感じることがある。自分は自分。それでいいじゃないかと。だから理幹の言つことごとくとも共感した。

過敏症で教室に入りたくても入れない留美名のパートでは、留美名とその幼なじみの小晴との関係性が印象に残った。留美名は過敏症を神経質になりすぎだと軽視され、自分で症状をコントロールできない不安から情緒が不安定になってしまつた。そんな留美名の愚痴を毎日聞いているのが幼なじみの小晴だ。小晴は人を放つておけない性格のため自分より留美名のことを優先してしまい、知らず知らずのうちに過食に走っていた。最後には小晴は留美名のことを正しく理解していなかったと反省し、留美名も唯一話を聞いてくれていた小晴にキツク当たったことを反省する。私はこの二人の関係性は理想的だと思う。相手を正しく理解する努力をして、相手側も援助されるのが当たり前ではなく誠意を持って接する。これが現代の模範となる関係性ではないだろうか。

冒頭で「私の思つ青春とは違った世界」と書いたが、改めて考えると自分と向き合つて、時には友人とぶつかつて、たくさん悩む。これこそ青春という感じがした。私のかつてのワラズメートにも、字を書くのが苦手な子がいた記憶がある。だが、私自身は不自由なく字が書けるためその子の努力不足なのだと思っていた。だが、この本を読んで初めてディスレクシアというものがあることを知り、表面に見えていたことが真実ではなく、その人の中では何か困難があるかもしれないということも学んだ。この本を読み、これからの生活で人知れず悩んでいた困難を抱えている人がいることに気づいたら適切に寄り添える人になりたいと思った。その人が望んでいないのに助ける必要はない。相手のことを知って、私にできる、本当に必要な手助けをするのだ。さらに言えば、手助けが必要なのはディスレクシアの人や過敏症の人だけではないはずだ。私が助けを必要とすることだってあり得る。そのときは、心桜のように自分にできる努力をした上で、助けをしてくれる人と、留美名と小晴のような関係性を築きたい。

『きみの存在を意識する』 梨屋 アリエ・著 ポプラ社

北海道高等学校PTA連合会石狩支部長賞
 周り、社会との関わり

北海道札幌国際情報高等学校 一年 橋本 菜夏

あなたはこの本の題名である、「なまよつ刃」という言葉を聞いて、まず何を思いますか。他の本では多く題名に筆者の伝えたい思い等が隠されていることがよくありますよね。しかしこの題名は想像することができませんでした。ですが、この題名にしたには、何かしらの東野圭吾さんの中で伝えたいことがあったはずだと思います。

私が東野圭吾さんの本にとりつかれて、約二年。今まで読んだ中で一番心に刺さった本がこの本でした。東野圭吾さんの本はミステリーが多く、ハラハラ、ドキドキが止まりません。それが読んでいて面白い理由の一つでもあります。とにかく、爽快感が止まりません。東野圭吾さんの本は、作者の経歴や経験が反映させているという特徴があります。先ほども書きましたが、一体何を東野圭吾さんは伝えたいのか、この本は日本の法律のこと(少年法)がとり入れられています。犯人に殺されてしまった女の子のお父さんが犯人に復讐しようとして様々な行動をしています。誰か知らない人から犯人の居場所と名前を告げる密告電話がかかってきます。そしてお父さんは犯人の一人を殺害しました。その犯人の部屋の中を物色していると、複数のビデオテープが見つかりました。そのビデオテープには犯人が女の子を殺すときの様子を撮ったものでした。お父さんの復讐はこれだけで終わりません。もう一人の犯人を追い続けました。すべては男を殺し、復讐するだけのために。その旅先で出会った女性のおかげで、お父さんは警察官からも逃げていれています。なぜ、その女性はお父さんを助けるなどといった行動をとったのか。そこには、ある理由があったのだ。その理由とは一体、何だろうか。正義とは何か。誰が犯人を裁くこととなるのか。世論を巻き込み、事件は予想外の結末を迎えることとなる。この物語を左右するといってもおかしくなく、言っているほど、一人の男がとても重要な役割をしているのだと、皆はお気づきになられたでしょうか。

私はこの本を読むといつも「思っている」のようです。

「私だったらどう考えるか、どう行動をするか。」
 と。娘を殺され、復讐をしたいお父さんの気持ち。でも復讐をしても結局は警察に逮捕されてしまうという運命。どちらの気持ちも共感できる。だから選べない。決めることがとても難しい。あなたは復讐をしたいかしないか、どちらの派ですか。

そこで私は自分の中で二つの問をじっくりしました。一つ目はもし犯人の名と居場所

を告げる密告電話がなかったらお父さんはどのように復讐しようとしたのか。二つ目は、私だったら復讐するか、しないか。一つ目の問に対して私はこう考えました。今の世の中、インターネット等を使えば、おそろしく犯人がどこかの家に住んでいたのか。そしてどこへ逃げて行ったのか。逃げて行った場所には何かしらの理由がある。家特定できたら、一人の犯人を殺す。そして仲間の名前はすべてにわかると言えるだろう。二つ目の問に関しては、私は復讐をするべきではないと思いました。娘を殺され、悔しい気持ちがあるのは山々。ですが後になって自分に返ってくるというのが一番嫌です。

東野圭吾さんの本を読んでいると、社会に対する見方が自分の中で少し変わったように思えました。私が今まで読んできたシリーズはよく社会と関係している本を読んでいた。ふとした瞬間に、記憶が蘇ってくる。私は中学三年生頃まで、本を読むのが大の苦手だった。読んでも一冊読み終わらないうちにあきて読まなくなるのがいつもだった。だが本を読むのが楽しいと思えたのがこの一冊でもあった。だから私にとってこの本はかけがえのない一冊と言っても過言ではないほど、大切にしている。ミステリーの物語は伝えたいことが他の本と比べ、少ないのだろうか。いや、私はそう思わない。この本ではお父さんの旅先で一人の女性と出会う場面があるがこの女性はお父さんを見捨てなかった。なぜだろうか。復讐をするのは良くないとわかっていたが、お父さんの気持ちがよく分かったからではないだろうか。旅先でも人と人との関わりを大切にしていたお父さん。やはり、日常生活においてもかかせない一つでもあるのではないだろうか。そして思いやりのある行動をとる。今、日本人に求められていることはこのことだと思えます。当たり前だと思っていた今、この生活。だけど、それはすごく幸せなんだと改めて思うことができました。そして、周り・社会に目を向けていく必要があると感じました。今の生活をもつ一度見直し、さらに周りの人との関わりを大切にしながら夢に向かって頑張ろうと思えました。

『なまよつ刃』 東野 圭吾・著 角川文庫

光陽社賞

ぼくとオランウータンの生きる道

札幌市立ノホロの丘小学校 六年 細谷 健人

ぼくはこの本を読むまでは、オランウータンについて、何も知らなかった。そんな時に母の友人の家でこの本を見た。タイトルを見ておもしろそうに手に取った。

ぼくが一番ショックだったのは、東京二〇二〇年オリンピック施設を作るために、ボルネオ島の木材を使ったという報告だ。ボルネオ島やスマトラ島の森林が伐採され、平和の祭典に使われた。しかも、違法に伐採されることもあると知って、さらに驚いた。これにより、木の上で生活しているオランウータンや他の動物たちの住処が減っていることを知り、悲しくなった。日本では、オリンピックは数多くの感動を与えた反面、複雑な気持ちになった。違法伐採で作られた物には、コピー用紙もある。その紙を自分も使っているかもしれない。知らないうちにオランウータンの住処を奪ってしまっているかもしれないと思ひ、いたたまれない気持ちになった。

環境問題について興味をもったので、自分の身の回りのことを調べてみた。ぼくは野球を習っていてプロ野球が大好きだ。野球の道具について調べると、プロ選手が使う木製バットは、アオダモという木を利用して作られている。日本球界を代表する人やアメリカで活やくする大谷翔平選手も使っている。アオダモは、バット材の王様と呼ばれ、北海道東部の天然林ではえており、バット用として最適だ。成長に時間を要する木であるのに、植林がほとんどされないまま大量に消費され続けてきたため、安定供給が困難な状況に陥っている。将来アオダモの木が減り、木製バットがなくなることはさげたい。このように、人間の

利便性を優先し、森林伐採をしていってはいけなと思う。

一度伐採された森を二次林と呼ぶ。オランウータンは、生きるために二次林で住むように工夫した。食べ物を変え、生活のしかたを変え、することで、森林伐採から、命の危機を乗り越えてきた。しかし、さらに人間は、オイルパーム農園を作るために、二次林を切り更地にしてしまった。オランウータンが農園をさまよっていると殺してしまう事態もおきている。オイルパーム農園をなくしてしまえば、オランウータンを守れると思ったが、この本を読んでオイルパームとは、ぼくらの生活にかかせない食品や生活用品に使われる植物油脂だということが分かった。そのためぼくは人間とオランウータンが、おたがいに生きていける方法を考えた方が良いと思う。オランウータンを守る保護施設が増えてきたが、まだ知らない人も多い。

本を読み終わりに、いてもたってもいられなくなった。自分にできることはないか考えた。パーム油が使われている洗剤やシャンプーを大切に使うこと、紙は両面を使用していく。ぼくができることは小さい。しかし、むだな製品を作らせないことが、過剰な伐採を防いで計画的に植林することにつながるはずだ。家族や友人と一緒に実践する。そう決意した。

『オランウータンに会いたい』 久世 農子・著 あかね書房

キハラ賞

『夢をかなえるゾウ』を読んで

札幌市立新川中学校 二年 荒木 果凜

私は、本を読むことが好きで、よく本を読んでいたが、習い事の空手で忙しく、本を読む時間がない為、学校からの宿題で読書感想文が出たときは正直、何を讀んだらいいのか迷いました。そんな時父が「これを読んでみたら？」と『夢をかなえるゾウ』という本を手渡ししてくれたのです。この本を手にした時、「けっこう分厚いけど読み切れるかな」と不安な気持ちになり急いで読み始めました。すると、意外とおもしろく、スラスラと読み終えることができました。

『夢をかなえるゾウ』には、僕とガネーシャという人が出てきます。僕は普通の会社員ガネーシャは三か月前にインドで買ったゾウの神様の置物です。一人が出会ったきっかけは、僕がその置物の前で「変わりたい」と言泣したことです。その後、僕の前に現れたガネーシャは、僕に毎日課題を出し、僕は毎日その課題をこなします。そして僕は、課題を通して成長し、あきらめた夢をかなえられる僕に変わっていくお話です。

物語中のガネーシャの課題は二十七個ありますが、その中で私が自分の為になるのではないかと思った課題を三つ挙げていきます。

一つ目は「その日頑張れた自分をホメる」
ガネーシャは「毎日寝る前に、自分がその日頑張れたことを思い出して『ようやったわ』てホメや。一日のうち、絶対一つは頑張れたことがあるから、それを見つけてホメるんや。一日の最後はな、頑張れんかったことを思い出して自分を責めるんやなくて、自分をホメて終わるんやぞ。そつやってな、頑張ったり成長したりすることが『楽しい』ことなんや、て自分に教えたるんや」と言いました。私は、頑張れたことよりも頑張れなかったことを責めてしまう性格です。上手いかないことがあると必ず母に「なぜつじつじするの、頑張れた点は無いの」と言われるので、ガネーシャの言葉と重なる点がありました。確かに、自分を責めた後成功につながったことはありません。自分の性格を変えるのは難しいですが、少しずつ自分をホメ、努力し成長することが「楽しい」といつか思える方に変えていければいいかな、う、心がけて過っていきます。

二つ目は、「夢を楽しく想像する」

これには共感しかありませんでした。物語中のガネーシャは僕に「思へば当たる

した」とつそをつきました。その時の僕は確かに夢を楽しく想像してました。夢を持つのはいいことですが、その夢が逆にプレッシャーになつては意味がないのです。私の夢は、秋にある空手の大会で全国大会への切符を手にし、高校の推薦につながることです。しかし、この夢を楽しく想像できるかと言われれば、緊張とプレッシャーしかありません。小さい頃は漠然と「空手の大会で全国に行ければデイズ二ランドに行ける」とワクワクしながら夢を想像していたのに、大きくなるにつれてそれができなくなっていました。夢にプレッシャーを感じるのではなく、想像してワクワクしてしまうのが夢、その感覚を忘れず、夢を持ち続けていきたいです。

三つ目は、「明日の準備をする」

私は必ず前日に明日の準備をしますが、何か一つ抜けてしまつ時もあります。それはきつと「なんとかなる」という気持ちで心のどこかにあるからです。確かに今までなんとかなっていましたが、そのかわり朝ごはんを食べる時間がない、走って登校する、など何かを犠牲にしています。それでは心と時間に余裕がなく、なんとかなっても上手くはいきません。明日の準備をする時は、メモを取ってチェックするなど、完璧に準備ができる工夫をし、心と時間に余裕ができれば、その隙間に何か一つ加えることで、人生は少しずつ変わっていくのではないかと感じました。

全体を通して、私が特に印象に残ったのは、「期待しているかぎり、現実を変える力は持てへんのやぞ」ともし自分が変われるとしたら、行動して、経験した時や。そんな時だけで」という部分です。私はこの本を読むまで自分に期待するのはいいことだ、と思っていました。しかし、期待はあくまで気持ちのみであつて、その期待を実現に向けた行動につなげなければいけないのです。

私はこの本を読んで、夢をかなえるために行動するのではなく、日々の行動によって夢がかなうかが決まる、行動を変えることによつて夢はかなう、ということに気付きました。最近の私は、空手の大会で全国、という夢だけが先行し、プレッシャーに押しつぶされ、思つような結果を残せていません。「もし自分が変われるとしたら、行動して、経験した時や」というガネーシャの言葉を胸に、自分の行動を見直し、経験を積み、夢をかなえる自分になれる努力をしていこう、そう前向きな気持ちにさせてくれた本に出会えて良かったです。

『夢をかなえるゾウ』 水野 敬也・著 文響社

教育出版賞

私の幸せ

札幌市立大谷地小学校 四年 豊沢 峰々

私は戦争を経験していない。見聞きした話や想像で、まるでコロナ禍はウィルスと人間の戦争のようだと静かに思っていた。

本当の戦争のようにはくだんが落ちて死ぬことも、家が焼けてなくなることもない。でも、感染して死ぬことだって、大切な人を失うことだってありうる。戦争を知っている人からしたら、ちがうと言われるかもしれない。でも戦争を知らない私は深い霧におおわれたような不安で心がいっぱいになる時がある。

私は十日間の学級閉さとなり、自宅待機となった。その時はまるでろう屋にいるような毎日を過ごした。そんな時、老人ホームに住むおばさんの言葉が心につきささる。「いくつになっても年をとっても人は前に進まなきゃいけないのよ。」この言葉が私を救った。

座敷童のカズラは、ある家に魔法でとじ込められた。それを知った女の子二人はカズラを助けようと計画をする。しかし、戦争が悪化しかなわぬ計画となった。その後、七十年以上の時が経ち、女の子の一人が老人ホームとして住むことになった家が、カズラの閉じこめられた家だった。老人ホームのみんなと協力してカズラを助け、カズラは無事家を出る。その後「カズラを助けたことは、幸せを逃すことになるのか。」と話をする。「私達は十分幸運。あの戦争の四年間を生き抜いて元気なんだから、これ以上どんな幸運が欲しいのよ。」とおばさん達はお茶を飲み、笑顔で話をした。

私の祖父は主人公のおばさん達と同年代で、学童期を戦争とその混乱の中で過ごした。父の死や、貧しい生活、当時の苦勞を話す。そ

の話に目をおおいたくなる。想像をこえた現実だ。しかし、話の終わりはいつも「つらいこともたくさんあったけど、おじいちゃんや幸せ者だな。」と目を細めて私を見る。私はいつも少し照れくさい気持ちになる。

戦争の時代だから、コロナの時代だから、私は不幸なのか。その気持ちのまま、亡くなった方もいるだろう。でも、私たちは今を生きている。どんな時代であっても、人は前を向いて進んでいかないとけない。戦争の時代は、思考や表現も制限されたが、今はちがう。私は自由に考え、表現することができ。学級閉さでも時間は止まらない。他のクラスはあたり前に学校に通い、勉強が進んでいく。おいていられるような不安がつのる。その反面、大好きな本を読み、うっとりするような空想にひたる時間もある。たくさんの本を読み、たくさん表現を知り、物語を想像する。その中で、たくさん感情を知り、笑い、泣く。それが私にとっての幸せの一つだと知る。

この先の未来が、たとえどんなに不幸だと言われたとしても、私が私の幸せを決める。カズラが不幸だったとは思わない。あの家で過ごした長い時間でも、幸せを感じた時間があったと信じて。私の心の霧は、晴れたり、くもったりを繰り返している。幸せを決めるのは自分と、じゅ文のようにつばやくのだ。

『ゆりの木荘の子どもたち』 富安 陽子・著 講談社

北海教育評論社賞

『ペスト』から考えるパンデミック

札幌聖心女子学院高等学校 三年 若林 星渚

新型コロナウイルス感染症が流行したことにより何気なく過ごしていた日常が変化しました。私はこれほど世界中に影響を及ぼしているパンデミックを経験したのは初めてだったので、この機会にパンデミックについて考えてみようという小説『ペスト』を読んでみることにしました。

この物語は、一九四〇年代に仏領アルジェリアにペストが流行したという設定の物語だ。感染症に立ち向かう医師とその周囲の人達の様子、取り巻く環境の変化が描かれている。ベルナル・リウーという三十代半ばの医師がある時から自宅周辺や街中で鼠の亡骸を目にするようになる。また同時に、リウーが不可解な病状で命を落とす患者に遭遇するようになるところから物語は始まっていく。

この物語の中に、「コロナが流行している現代社会に類似していると感じた印象的な場面が幾つかある。一つ目は、リウーが医師仲間と話し、今起きていることをペストだと認識して市長にこの事について話すが、市長はペストと認識することを渋り注意喚起程度の扱いとなってしまうため、結果として政府の対応が遅れ死者が急増していった場面だ。何故その場面が印象に残っているかというと、コロナが流行しはじめた初期の頃のWHOの発言と重なっている部分があると感じたからだ。テドロス事務局長が発言した「人から人への感染リスクは少ない」、「パンデミックと宣言するのは時期尚早」など、国際機関がこのように発言することによって油断してしまう人々が出てきたのは、まさに作中にある場面と重なっている。

二つ目は買い占め騒動が起こる場面だ。小説では感染防止になるという迷信からハッカドロップが売り切れる。現代でもコロナが流行した当初マスクや除菌スプレーを買った人が続出し、売り切れてしまつという事態があった。

三つ目は、オラン市は観光が盛んな市であるため、ロックダウンによる経済への打撃が描かれている場面だ。パンデミックが起こり人の移動が制限されるため、観光業や飲食業などのサービス産業にも関わり、人々の生活に大きな影響がでてくる。改めて感染拡大というのは恐ろしい影響力があると感じたので印象に残った。

そして最後に、毎日のように死者が増えていくことにより病院や行政も対応しきれなくなり、医療崩壊に向かっていく場面はまさに現在の状況を彷彿させる展開であったため特に印象深かった。しかし、同じように感じた中にも違いがある。ペスト

はノミで感染が拡大する病気と考えられていたため、コロナのように対人接触が危険という認識はなかったことだ。そのため、ロックダウンといっても住民は外出している。その一方で、医療崩壊を防ぐために保健隊というボランティア組織が結成され、ペストに立ち向かっていく。

大きく印象に残った場面は以上の四つだが、そのどれもが現代にも通ずる部分がある。ペストやコロナのような不条理な感染症や物事への理解と見極めはパンデミックに立ち向かう私達に必要なことだとこの小説から学んだ。コロナ禍で書かれたのかと疑問に思うくらい登場人物の動きが現在の日本人にもリンクしているところがあり、時代や場所は違っても、天災に対して人間の取る態度はあまり変わらないのだと気付けた。そして、この小説は「不条理」な状況における人々の心情が描かれているので、その心情に対して共感したり、客観的に見ることができた。終わりの見えない恐怖、疲弊していく人々の心、家族や友達に会えない辛さに向き合っていく反面、その状況を受け入れ時代の流れに沿って生きていくことが、パンデミックと向き合って生活していくのに必要不可欠だと思った。

パンデミックとは身近な存在ではない故にその影響力はとても大きい。だから戦争が繰り返されるのと同じように、コロナが収束した後、またいつか感染症パンデミックが起こったとして、この小説や現代と重なる状況が起こり得るだろうと思う。だが、インターネットが発達した今、情報の取捨選択は昔とは比較にならないほど容易になっている。これからの時代にパンデミックに向き合うには、インターネットは不可欠なのだ。時代によって考え方は変わるものだ。だからこそこの本からはパンデミックに対する考え方の変わらぬメッセージを読み取ることができる。いつの時代も様々な人に読んでほしい一冊であると思った。

『ペスト』 カミュ・著 宮崎 嶺雄・翻訳 新潮社

図書館ネットワークサーブिस賞

かんしゃのおべんとつ

札幌市立平岡小学校一年 山本 琴音

この本をよんで、いままでしらなかったたくさんのことがわかりました。

ようちえんのおべんとつのお、えんそくするとき、いつもおかあさんがつくってくれたおべんとつは、スーパーでやさいやおにく、おさかな、くだものかをかいいいって、つくってくれていました。

でもスーパーでかうやさいやおにくは、にほんやせかいのおいところからきているものがたくさんあるということがわかりました。いつもぶつにたべていたおいしいおべんとつは、わたしがしらないところでたくさんのひとのでつくられて、じかんでかかしてはこぼれてきて、たくさんのひとがたいせつにしてくれていたのです。

この本をよんだとき、わたしはみみのしゅじゅつのため、びょういんにゆういんしていました。びょういんのしゅじゅつは、きらいなやさいのにもはかりで、ていこ、だいいんはのこしてしまいました。でも、この本をよんでから、このしゅじゅつがはこぼれてくるまで、メニューをかんがえてくれたひと、やささをだててくれたひと、はこぼれてくれたひと、びょういんをひきくつてくれたひと、びょういんをひきくつてくれたひと、たくさんのひとがきょうしゅじゅつをひきくつてくれたのだとおもいました。しゅじゅつがよくなるまで、おもうました。

げんきになつたといんして、さいきんスーパーへかいものについていったとき、

「このバナナはどこからきたの。」

「このおさかなはどこでとれたの。」

と、おかあさんにきくようになりました。

これからは、ようぶくやおもちやなどいろいろなものも、どこからきたものなのか、きょうみをもってしらべてみたいです。

おべんとつのおかずは、おかあさんだけではなく、いろいろなひとのあいじょうがいっぱいしまっているものだったのです。かんしゃをしてたべたいです。

『どこからきたの？おべんとつ』 鈴木 まもる・著 金の星社

図書館ネットワークサービス賞

サステナブル〜持続可能な地球を目指して

札幌市立新川西中学校 一年 佐藤 奈央

マイクロプラスチック。聞いたことのある言葉に私はドキッとした。この物質の恐ろしさを、以前テレビ番組で観て知っていたからだ。主人公の七海がハワイのビーチで見つけた、カラフルできれいなつぶつぶ。その正体を知って七海はショックを受ける。私も七海と同じように衝撃を受けたことを思い出した。

マイクロプラスチックとは、直径五ミリメートル以下の小さなプラスチックのことをいう。マイクロプラスチックは放っておいても自然に分解されることなく、細かい破片として残る。つまり、ポイ捨てされたペットボトルやビニール袋などはマイクロプラスチックとなり、永久に消えることなく海や陸地に残って環境汚染の原因になるのだ。

七海が出会った画家のピカケちゃんの言葉が、私の印象に強く残っている。「海の生き物たちはみんな、プラスチックを食べている。食べざるを得なくなっている。そして私達はその魚を食べている。人間が捨てたゴミは結局、人間の口に返って行く。」

私たちも知らず知らずの内にプラスチックを食べているかもしれない。そう思うと魚を食べるのが恐ろしくなった。私が見たテレビ番組でも、ビニール袋を大量に飲みこんで死んでしまう鳥や、胃の中からたくさんマイクロプラスチックが出てくる魚が紹介されていた。また、適切に処理されずにポイ捨てされた大量のプラスチックごみが空き地を埋め尽くし、そこには草や木が生えてこない、ということも説明されていた。草木が生えないということは、二酸化炭素が吸収されない。つまり、地球温暖化につながるということだ。私たち人間が便利さから大量に利用しているプラスチックごみになってその中にはまかれることで、地球を破壊しているのだ。このままでは、地球がどんどん住みにくい星になっていきます。

七海はハワイからの帰国後、川辺のゴミ拾いを始めた。私も毎年、町内会のゴミ拾いに家族で参加している。川辺には大量のごみが捨てられているが、中でも多いのはペットボトルやお弁当の空き容器、お菓子などのビニール包装だ。どうしてこんなにもごみのポイ捨てが多いのかとあきれしてしまう。でも、この本を読んであきれただけでは何も解決しないと思う。どうしたらプラスチックごみのポイ捨てが減らせるか、私たちは真剣に考えて行動を始めないといけない。

私が考えたのは、まずプラスチックごみの恐ろしさや環境への悪影響をみんなが知るべきだということだ。「その時よければいい」という自分勝手な考えで、じやまになつたごみを平気でその辺に捨ててしまう人がたくさんいる。そんな無責任な行動があちこちで当たり前前に起きているのは、無知と無関心のせいだと私は思う。大勢の人がもつと簡単に知ることができるようにはできないだろうか。例えば、ペットボトルや食品のパッケージにマイクロプラスチックのことをのせて、ゴミの適切な処理の大切さを訴えるというのはどうだろうか。七海や私のようにプラスチックごみの恐ろしさを知って、このままではいけない、と感じる人が増えてくれるのではないだろうか。

また、公共の場にゴミ箱が少ないこともポイ捨てが多い原因だと考えた。ペットボトルやお弁当の容器など、空になったゴミはじやまになるし持ち歩きたくない気持ちもよく分かる。ゴミ箱をもつと設置してポイ捨てを減らし、地球環境を守るのはいいアイディアではないだろうか。ペットボトルをゴミ箱に捨てるたびにポイントが貯まるようなシステムを作るのも良いかもしれない。ポイントはコンビニなどで買い物に利用できるようにすると、みんなが関心を持って参加してくれるのではないだろうか。

日本でゴミ拾いを続ける七海にピカケちゃんがこう伝えている。

「ひとりのアクションが十人のアクションになり、十人が百人になり…やがてそれが人類全体に広がっていけば、地球環境は守られます。」

七海がひとりで始めた川辺のごみ拾いはやがて「川べりクリーン作戦」となって少しずつ広がりを見せていく。

「やるうと思えばできるんだ。思っているだけじゃなくて、その思いを行動に移さすすれば。」

その通りだと思った。私も町内会のごみ拾いを続けるだけでなく、他にもできることを考えて行動に移したい。小さな一歩から踏み出して、それを広げていけたらいいと強く感じた。サステナブル・ビーチ、そしてサステナブル・アースを未来に残すために。

『サステナブル・ビーチ』 小手鞠 るい・作 カシワイ・絵

さ・え・ら書房

光村図書出版賞

牧野富太郎、日本植物学の父を読んで

札幌市立北野中学校 一年 高橋 駿輔

「あこがれるだけではないかん。そのひまがあつたらまず行動を起こさう。」
僕はその言葉を見た時にハッとした。僕は考える時間が長く、行動に移すのに時間がかかる。それは自分が気にしていた事だった。

富太郎の行動力はピカイチだ。明治に土佐から東京に出るなど、相当の行動力だ。植物採集に離島の利尻までも来ている。家には床が傾くほどの標本。徹底している。富太郎は江戸の終わりに土佐で生まれ、幼い頃から植物が好きで、昼は植物採集、夜は医者の方の図鑑の書き写しを熱心に見た。

その後、二十冊揃いの専門書を祖母が購入してくれ、格別の嬉しさだったと富太郎は言っている。毎日朝も夜もこの書物を読み、植物の名前を覚えるのに夢中になった。

幼少期のこの話で、僕はすでにひき込まれた。図鑑を書き写すなんて、今の時代では考えられない。すごい根気だ。びっくりだ。

実は僕も、幼稚園の時に初めてもらった昆虫図鑑を毎日毎日隅から隅まで見ていた。一週間で綴じ糸は切れ、ページは外れ、母はつきり不良品だと思ひ、図鑑は長く使うからとメーカーに交換してもらった。しかし、その交換品もやはり二週間でボロボロ。あのワクワクした気持ちを富太郎も感じながら読んでいたと思うと、僕はとても親近感を感じた。

富太郎は植物という一つのジャンルを深く掘り下げ、良く観察し、最終的にたくさん植物の学名をつけた事は、大きな功績だ。明治になってローマ字も改めて勉強したろう。

学名をつけるには、それぞれの植物の特徴を事細かく覚えなくてはならない。研究者は大変な量の植物の特徴を覚える必要がある。それを成し得たのは、植物に対する熱い情熱があったからだ。

学名についての説明も詳しく、大変分かりやすかった。植物も昆虫も同じだった。昆虫、オオクワガタの場合、オオクワガタという種類が学名の基本となる。そこから細かい種類に分け、その種類しかない特徴を探す。それが見つかる、特徴が学名として付けられる。発見者の名前になる事もある。この場合、基本のオオクワガタ+特徴、または発見者、となる。学名の存在は知っていたが、新種を学会で発表する時

に、世界の研究者と話す時は学名が基準となることを、僕はこの本で学んだ。
しかし、人生は良い事ばかりではない。標本や資料を自費で買つと給料はすべてに
無くなり、貧乏で三十回も引越した。

東大も突然出入り禁止にされる。世界で注目される発見をして世界に名前が知ら
れると、教授はそれを面白く思わなかった。

富太郎はただ植物が好きで、一生懸命に研究をしていただけだ。しかし、小学校中
退の富太郎が東大の教授に遠慮せずにものを言う事が、教授は面白くない。富太郎
の植物学者としての実力ははずば抜けていたが、今でいう、KY・空気が読めない、だ
ろう。教授に自分の出世に邪魔になると思われたのだ。

この時ピンチを救ったのは、東大で一緒の友人達だった。友人が駒場の農科大学
の話を持ってきてくれ、研究の場は確保された。友情とはなんとありがたいものだ
ろう。ここで僕が感じたのは、勉強だけではない、まわりから愛され助けられる富太
郎の姿だ。友人達との友情で研究を続ける事が出来、妻や娘達は貧乏でも明るく生
きて研究に協力してくれた。教授がいなくなると土佐へ帰った富太郎を再び東大へ
呼び寄せてくれた。東大助手をクビになると、たくさんの人達が東京大学の学長に
強く訴えてくれて、また大学に戻る事ができた。大事な標本も売るほどの貧乏の時
は、新聞記者が記事を書いてくれ、おかげで研究費の補助をしてくれる人が現われ
た。

様々な困難に手を差しのべてくれる人が現われるのは、植物学の才能ももちろん
だが、やはり人間性が大きいと感じた。研究への熱心さと、ひたむきに努力する姿。
それが真の研究者の姿だと思った。

富太郎は植物学の研究に一生懸命で、自分のお金はひたすら研究に使い貧乏だっ
た。決してせいたく消費ではない。だから助けたい、応援したいとなるのだろう。

人は明るい人にも集まると僕は何かの本で読んだ。明るくひょうきんな富太郎には、
人を引き寄せる魅力があったのだ。それが人間力なのかもしれない。

今まで色々な伝記を読み、素晴らしい勉強をした話はたくさん読んだ。しかし今
回は研究の素晴らしさだけでなく、人としての魅力と行動力が大事であると感じた。
失敗するかもしれない。しかしためらうては何も始まらない。理想を語るよ
り行動だ。自分で決断、行動する事が僕の人生の第一歩なのだ。

今後様々な困難が僕を待ち受けているだろう。しかし失敗を恐れずチャレンジし、
人生の困難を乗り越えていきたい。

佳 作

◇小学校の部 低学年

指定	しんだらどうなるのかな	札幌市立桑園小学校	1年	菅 原	悠 心
自由	カラスのいいぶん ぼくのいいぶん	札幌市立大倉山小学校	2年	野 中	蒼 汰
自由	『オタマジャクシのうんどうかい』を読んで	札幌市立桑園小学校	2年	坪 松	健 太 郎
自由	『おねえちゃんって、すっこもやもや!』をよんで	札幌市立桑園小学校	2年	鷲 尾	步 咲
指定	『悲しみのゴリラ』を読んで	札幌市立南小学校	2年	只 野	權 斗

◇小学校の部 中学年

自由	しあわせゲームが広がれば	札幌市立東園小学校	3年	佐 藤	日 和
自由	『巨大ダコと海の神秘』をよんで	札幌市立円山小学校	3年	範 國	美 冬
自由	『魔法のたいこと金の針』を読んで	札幌市立北園小学校	3年	北 井	愛 彩
課題	約束の庭	札幌市立桑園小学校	3年	吉 田	唯 純
指定	知床の自然と人とヒグマの暮らしを読んで	札幌市立白楊小学校	3年	白 坂	俊 裕
自由	過去の約束、いまの命未来の願い	札幌市立西岡北小学校	4年	毛 利	優 月
課題	世界の平和と私の幸せ	札幌市立菟寒南小学校	4年	小 島	愛 奈
課題	ぼくのいいぶん	札幌市立西宮の沢小学校	4年	板 倉	悠 起
課題	共に生きる	札幌市立平岸高台小学校	4年	芹 川	礼 奈

◇小学校の部 高学年

自由	『びりっかすの神様』を読んで	札幌市立新琴似南小学校	5年	上 野	晴 南
自由	幸せとは	札幌市立緑丘小学校	5年	濱 田	夏 綺
自由	希望のかけら	札幌市立厚別通小学校	5年	吉 田	桜 彩
課題	否定しない世界に	札幌市立円山小学校	5年	村 尾	優 衣 花
指定	『警視庁「生きもの係」事件簿』を読んで	札幌市立日新小学校	5年	齋 藤	楓 子
自由	カカ・ムラドのつながる思い	札幌市立新陽小学校	6年	竹 内	柊 花
自由	おいしいトンジルを作るために	札幌市立厚別西小学校	6年	坂 本	温 音
自由	『君たちはどう生きるか』を読んで	札幌市立円山小学校	6年	富 樫	さくら
課題	自分が目指す姿	札幌市立日新小学校	6年	小 林	楽 央
課題	私だけの形をけずるために	札幌市立福住小学校	6年	岩 本	亜 澄
課題	なりたい自分に変わりたい	札幌市立厚別北小学校	6年	佐 々 木	碧
指定	『消えたレッサーパンダを追え!』を読んで	札幌市立美香保小学校	6年	田 中	柚 妃
指定	『命のうた』を読んで	札幌市立新川小学校	6年	小 笠 原	七 実
指定	『きみの声がききたくて』を読んで	札幌市立桑園小学校	6年	須 田	健 心
指定	「生き物を大事にする」って?	札幌市立桑園小学校	6年	棟 安	陽 葵

◇中学校の部

課題	『アーニャは、きつと来る』から学ぶ日常の大切さ	札幌市立向陵中学校	1年	武 田	仁 那
課題	命への呼びかけ	北嶺中学校	2年	前 田	海 杜
自由	弁当の日を通して「当たり前」を学ぶ	藤女子中学校	3年	加 納	侑 和

◇高等学校の部

自由	残り10年の人生から学ぶこと	北海道札幌国際情報高等学校	1年	古 内	佑 奈
自由	ゼロにできないこと	札幌聖心女子学院高等学校	1年	山 本	桃 香
自由	『ぼくがスカートをはく日』を読んで	札幌聖心女子学院高等学校	2年	白 石	志 帆
自由	奪われた「日常」	札幌光星高等学校	2年	棚 橋	步 実
自由	一番好きな本	市立札幌啓北商業高等学校	2年	嶺 岸	香 志

優良賞

◇小学校の部 低学年

自由	『すずめのまる』をよんで	札幌市立美香保小学校 1年	遠藤 愛季
課題	わたしにもそのときがきますように	札幌市立平岸高台小学校 1年	芹川 由依
課題	そのときがくるくる	札幌市立伏古小学校 1年	小関 隼人
自由	たのしみな手がいみ	札幌市立新川中央小学校 2年	山田 うみ
課題	半分くるくる	札幌市立北九条小学校 2年	土肥 樹生
課題	ぼくが元気なのはみんなのおかげ	札幌市立桑園小学校 2年	岡 大翔

◇小学校の部 中学年

自由	取り扱い説明書って何だろう？	札幌市立北野台小学校 3年	森永 萌々夏
自由	はげましリレー	札幌市立開成小学校 3年	小野 芽衣子
課題	やっかいだったけど…	札幌市立篠路小学校 3年	高田 智仁
課題	わたしの体そう図かん	札幌市立栄小学校 3年	中島 裕菜
課題	カメムシはやっかいもの？	札幌市立澄川南小学校 3年	皆川 広登
指定	ぼくがAIロボットを手に入れたなら	札幌市立桑園小学校 3年	木村 暉
自由	はるに教えてもらったこと	札幌市立北野台小学校 4年	中川 華
課題	『カラスのいいぶん』を読んで	札幌市立新光小学校 4年	佐藤 美和
課題	私の冒険	札幌市立伏古小学校 4年	小関 夏果
指定	AIと人間	札幌市立白楊小学校 4年	猪口 誠太

◇小学校の部 高学年

自由	夢に向かうって楽しい！	札幌市立清田緑小学校 5年	東地 賢頼
自由	私の居場所	札幌市立福住小学校 5年	引田 明里
課題	人間のいとこオランウータン	札幌市立琴似中央小学校 5年	林 瑞季
指定	想いを背負って生きていく	札幌市立厚別北小学校 5年	鈴木 爽太
自由	だれかの記憶に生きていく	札幌市立もみじの森小学校 6年	竹田 雅
自由	美咲ちゃんが教えてくれたこと	札幌市立桑園小学校 6年	元村 有

◇中学校の部

自由	天使のにもつ	札幌市立向陵中学校 1年	本田 乃愛
自由	笑われたってやってるし	藤女子中学校 1年	黒田 梨乃
自由	『カラフル』を読んで	札幌市立伏見中学校 1年	津田 直花
課題	牧野富太郎の人生を知って	札幌市立琴似中学校 1年	和田 侑恭
自由	『坊っちゃん』を読んで	藤女子中学校 2年	伊藤 彩葉
自由	愛する人を失ったときあなたに起こること	札幌市立向陵中学校 2年	佐々木 凜奈
課題	今、私たちに出来ること	札幌市立北辰中学校 2年	西谷 優乃香
指定	『ドーナツの歩道橋』を読んで	札幌市立向陵中学校 2年	堀山 直浩
自由	生きる価値	札幌市立向陵中学校 3年	品川 悠那
自由	52ヘルツの声	札幌市立向陵中学校 3年	齋藤 亜唯
自由	『永遠の0』を読んで	札幌市立屯田北中学校 3年	佐々木 悠衣
課題	人を想って行動する	札幌市立向陵中学校 3年	金井 美咲子

◇高等学校の部

自由	ユーモア最終形態	札幌光星高等学校 1年	櫻井 麻央
自由	『かがみの狐城』が伝えたいこと	北海道札幌国際情報高等学校 1年	南 侑那
自由	『こころ』を読んで	札幌光星高等学校 2年	薬師 瞭
自由	人の心の多面化と順応	市立札幌啓北商業高等学校 2年	三上 颯太

第67回 札幌市読書感想文コンクール 入賞者一覧

令和3年度

札幌市長賞	札幌市立南月寒小学校 自由	5年	河口留偉	ぼくの大実験
札幌市議会議長賞	札幌市立向陵中学校 課題	3年	松田莉奈	夢を叶えるために
札幌市教育長賞	札幌光星高等学校 自由	3年	加藤萌香	勇気とは意外とあっけない
札幌市学校図書館協議会 会長賞 1	札幌市立平岸高台小学校 指定	3年	藤井雄大	これからも友だち、これからの友だち
札幌市学校図書館協議会 会長賞 2	札幌市立新川中学校 自由	3年	福井亜梨	『嫌われる勇気』を読んで
札幌市学校図書館協議会 会長賞 3	札幌聖心女子学院高等学校 自由	2年	目良茉莉香	『老人と海』を読んで
札幌市PTA協議会 会長賞 1	藤女子中学校 自由	2年	栗津結葵	人間の心の奥
札幌市PTA協議会 会長賞 2	札幌市立緑丘小学校 課題	1年	野里尚慈	せかいに1つしかないズボン
札幌市PTA協議会 会長賞 3	北海道札幌国際情報高等学校 自由	1年	本間楓華	『きみの存在を意識する』を読んで感じたこと
北海道高等学校PTA 連合会石狩支部長賞	北海道札幌国際情報高等学校 自由	1年	橋本栞夏	周り、社会との関わり
光陽社賞	札幌市立ノホ口の丘小学校 自由	6年	細谷健人	ぼくとオランウータンの生きる道
キハラ賞	札幌市立新川中学校 自由	2年	荒木果凜	『夢をかなえるゾウ』を読んで
教育出版賞	札幌市立大谷地小学校 課題	4年	豊沢峰々	私の幸せ
北海教育評論社賞	札幌聖心女子学院高等学校 自由	3年	若林星渚	『ペスト』から考えるパンデミック
図書館ネットワーク サービス賞 1	札幌市立平岡小学校 課題	1年	山本琴音	かんしゃのおべんとう
図書館ネットワーク サービス賞 2	札幌市立新川西中学校 自由	1年	佐藤奈央	サステナブル～持続可能な地球を目指して
光村図書出版賞	札幌市立北野中学校 課題	1年	高橋駿輔	『牧野富太郎、日本植物学の父』を読んで

学校賞

毎日新聞社賞

北海道札幌国際情報高等学校